

……………14回おきなわ環境交流集会……………

1. おきなわ環境交流集会の目的

おきなわ環境交流集会とは、持続可能な社会の実現に向けて、沖縄県内における環境保全活動がさらに盛んになるための情報・意見交換や相互交流の場を提供しようと開催されているもので、今年度で14回目を迎えます。具体的には、以下の3点を主な目的に据えています。

県内で環境保全活動に取り組む様々な事例を知り、自分たちの今後の活動のヒントとすることで、県内の環境保全活動をさらに活性化させる。

活動発表やワークショップを通して、各団体の交流を促進し、県内の環境保全活動のネットワークやパートナーシップの強化を図る。

県民環境フェアの一般来場者に対して、県内環境保全活動の情報を提供し、こどもエコクラブ¹サポーター等との交流促進や、環境保全活動への参画や意識啓発の向上を促す。

2. おきなわ環境交流集会の概要

名 称：いちゃりばエコデー交流集会（第14回おきなわ環境交流集会）

日 時：平成20年1月27日（日） 2007おきなわアジェンダ21 県民環境フェアと同時開催

会 場：うるま市役所 本庁舎内市民ロビー

主 催：沖縄県・おきなわアジェンダ21 県民会議

プログラム内容：

アイスブレイク【10分】

初対面の参加者同士が打ち解け合えるような、体を使ったゲームを行いました。



環境保全活動に取り組む団体の活動発表【60分】

与那原町「あかぎ児童館こどもエコクラブ」・南城市立船越小学校・県立北中城高等学校（沖縄県環境教育プログラムモデル校）・「EARTH FROGS」（県内初のインカレ型学生環境サークル）の4団体が、日頃のエコ活動について、模造紙やパワーポイント等を使って具体的に紹介しました。

¹ こどもエコクラブ：こども（幼児～高校生）が誰でも参加できる、環境活動クラブのこと。2人以上の仲間（メンバー）と、活動を支える1人以上の大人（サポーター）で構成される。「こどもエコクラブ」事業を通じて、環境省、県、市町村、団体・企業等が、地域における子どもたちの自主的な環境学習や実践活動を支援している。沖縄県では平成20年2月時点で、58クラブ・約1,400人が登録をしており、本島・離島で様々な活動が展開されている。

壁新聞セッション【15分】

こどもエコクラブや環境教育プログラムモデル校などが制作した壁新聞、および活動紹介展示を会場一面に展示し、参加者が歩き回りながら自由に閲覧しました。参加者は予め用意されたメッセージカードに壁新聞を見ての感想や激励、改善提案などを書き込み、それぞれの封筒に投函しました。



世代別グループミーティング【30分】

比較的近い世代・立場同士で、交流と情報交換、今後の活動のヒントを深めるため、小学生・中学生グループ、高校生・大学生グループ、大人グループの3グループに分かれ、「これから取り組んでみたい活動」「それを実現するために何をすべきか」等をテーマにミーティングを行いました。また、ミーティング終了後にそれぞれのグループ内で出た意見を、代表者が発表しました。



3R推進マイスタープログラム【70分】

3R推進マイスターの吉田順子氏による環境教育実践プログラム「地球はともだち...沖縄エコカルタで遊ぼう」を実施しました。



おきなわ環境みらいの樹【常時実施】

参加者が持ち寄る環境保全活動へのメッセージや写真を、葉っぱや実に見立て、ひとつの大きな樹に仕立て、環境保全活動の壁新聞とともに会場に掲示しました。1人ひとりの環境保全活動への意気込みを見て取り、自分の活動への刺激とすることを目的としました。





参加者

所 属	大人	子ども・児童 生徒・学生	合計
あかぎ児童館	2	1	3
愛星ネットワーク	4	9	13
OMRC こどもエコクラブ	1	0	1
ICC エコクラブ(国際コミュニティカレッジ)	4	1	5
南城市立船越小学校	1	0	1
県立北中城高校	0	4	4
県立真和志高校	1	4	5
EARTH FROGS	0	2	2
県立辺土名高校	1	0	1
西表エコプロジェクト	1	0	1
環境省リサイクル推進室	2	0	2
3 R 推進マイスター	1	0	1
環境省那覇自然環境事務所	1	0	1
沖縄環境経済研究所	2	0	2
ホールアース研究所スタッフ	6	0	6
合 計	26 名	21 名	47 名

3 R 推進マイスタープログラム参加者

子ども	大人	合計
24 人	7 人	31 人



3. 詳細内容

下地 寛(沖縄県文化環境部環境政策課長)挨拶

会場にお集まりの皆様、こんにちは。いちゃりばエコデー交流会(第14回おきなわ環境交流集会)を開催するにあたり、ご挨拶申し上げます。

おきなわ環境交流集会は、環境保全活動に取り組まれている環境団体、こどもエコクラブ、学校、行政など様々な分野の方々が、沖縄のよりよい環境づくりのため、お互いの活動からの知恵や知識を分かち合い、協力し合って、それぞれの活動を更に強力にしていくために開催しています。

今日の集会は、準備段階から、既に協力の輪が始まっており、県民環境フェア実行委員会やおきなわアジェンダ県民会議を始め、多くの方々の協力の下、こうして開催させて頂けることとなりました。心より感謝申し上げます。

今日は、県内では北は国頭村から南は西表島まで、様々な世代、様々な分野で環境保全活動に取り組まれている方々が集まって下さっています。

子どもエコクラブの皆さんや、県内小学校の皆さん、環境教育プログラムモデル校の皆さん、先ほど県知事賞を受賞された方々、うちなー学生サークルEARTH FROGの皆さん、その他、展示作品で参加されている方々もいらっしゃいます。

また、沖縄環境経済研究所さんや、那覇自然環境事務所さんのほか、県外からも、環境省及び環境省3R推進マイスターさんらが応援に来てくださっています。

環境問題の解決には、「いろいろな方向からものごとを捉え、考えること」がとても重要です。今日は、それぞれの活動や知恵、知識、考え方を紹介し合って、たくさんの新しい視点を発見してみてください。こうした発見は、皆さんの今後の活動に広がりや強さ、新しい発想や理解、そして醍醐味などの楽しさをも与えてくれることでしょう。

一人ひとりの決意と実行が積み重なり、輪を広げて大きな力にしてゆけば、きっと大きな力となり、問題の解決に繋がっていくものと考えます。私たちの今と未来のために、手を取り合って、しっかり取り組んでいきましょう。

最後に、今日の集会在、今後の環境教育の推進につながるるとともに、ご参加いただきました皆様が、新しい環境社会を創り上げていく原動力となり、さまざまな活躍、飛躍をされることを願って、ご挨拶と致します。

あかぎ児童館こどもエコクラブ 活動発表

パワーポイントを使って、エコクラブの活動の様子が具体的に紹介されました。沖縄県環境保全功労者表彰賞として表彰されたエコクラブだけに、参加者は興味津々にじっくりと発表に聞き入り、活発な質疑応答が行われました。

与那原町のあかぎ児童館こどもエコクラブは、「子供たちのための子供たちによる活動」をテーマに活動しています。現在、メンバーは、子どもエコキッズ 11 人、ジュニア 15 人、リーダー6人、サポーター29人の合計 61 人です。

毎週土曜日の 10 時～12 時あかぎ児童館を拠点に活動しています。クリーン活動として、毎月第 2 土曜日に地域の清掃活動を行っています。

環境学習会として今年は、地域環境センターから講師の方を招いて出前講座をしてもらい、日本はほかの国に比べてエネルギーを多く消費する生活をしていることを学びました。普段の生活の中でも気をつけたいと思います。

イルカと触れ合う「ドルフィンプログラム」も体験しました。そのほか、自然の中で体を動かして遊ぶ自然体験活動もやっています。やはり、自然の中で遊ぶのが一番楽しいです。

また、エコまつりという児童館のお祭りにおいて、模擬循環社会「くるくる町」をこどもエコクラブ主体で展開しています。

仮想の街を設けて役場・銀行・ハローワークを設置

ハローワークで紹介された仕事をすると給料（エコマネー）がもらえる

そのエコマネーでゲームやリサイクル商品を買うことができる

という循環型社会の仕組みを、遊びながら学ぶものです。

さらに、エコまつりでは、リサイクルショップを運営し、飲食物を販売した収益を活動資金にするべくお母さんたちががんばってくれました。また、このときには、リユースカップを使ったので、ゴミの減量にもなりました。

全国児童館・児童クラブ沖縄大会においては、先ほどの「くるくる町」を発表し、「子どもたちが自主的に行動し、生き生きしている」と高い評価を受けました。

ハッピー・エコリユクス in 久米島として、久米島へのエコ交流体験にも出かけました。この中で、久米島ホテルの会や環境省、地元の方との交流することができました。また、外来種であるブルーギルという魚を釣って食べました。美味しかったです。また、はての浜のクリーン活動も行いました。多くの漂着ゴミを拾ったので、ゴミのない地球にしていきたいという思いを強くしました。

今までの活動を通して、多くの人に支えられてやってこられたことを痛感します。エコクラブの活動を続けることを通じ、子が変わったことにより親が、親が変わったことにより地域が変わり始めた実感しています。この結果、子どもたちの心も育ってきたと思っています。

これからも、地域のため、地球のための活動をがんばっていきたいと思います。



参加者からのコメントおよび質疑応答

(環境省3R推進マイスター吉田氏)

- ・ 活動が多分野に渡りますが、いろいろと大切なことをやっているようですね。
- ・ 長距離航路の船長によれば、太平洋の真ん中でも漂流するゴミを見ない日はないそうです。ゴミ拾いや、ゴミを出さない暮らしをこれからも頑張ってください。



(愛星ネットワーク)

- ・ これらの活動は、大人たちから提案するのですか。それとも、子どもたちのほうから自主的にやりたいと言ってくるのでしょうか。
- ・ 私たち(愛星ネットワーク)は活動を開始してまだ2年目のため資金も苦しく、久米島などまでの旅費もまかなうのが大変です。活動資金はどうしているのでしょうか。

(あかぎ児童館)

- ・ 久米島ホテルを見たいという声は、子どもからも大人からも上がりました。昨年度のおきなわ環境交流集会で、離島の方とお会いしたことをきっかけに久米島を訪れることになり、さらにそれがきっかけとなって、久米島にもこどもエコクラブが誕生しました。また今回の旅費は、フリーマーケットやお祭り等で得た収益と、久米島ホテルの会から頂戴した助成金を資金源にしています。

(愛星ネットワーク)

- ・ 私たちは、週末に畑作業を行い、育った農産物売る「ハルサー活動」を通して活動資金を得ていますが、まだ3,000円が集まった程度です。目標を大きく持って、地道に取り組んでいきたいと思えます。

南城市立船越小学校 活動発表

発表者の大城先生他2名の方が、昨年に「理科を通じた環境教育」をテーマとした研究発表を行ったことから、その取り組みの様子が詳細な写真と共に紹介されました。会場からは、分かりやすく興味深い実験内容に、「ぜひ大城先生の授業を受けてみたい」という声が挙がりました。



小学校6年生の理科の授業では、「生き物と環境」という単元において、生活に関わりの深い、また最近よく話題にもなっている「環境」に目を向けるため、さまざまな実験を通して、自然のことを考えてもらっています。ここでは、私が、ほかの2人の先生とともにまとめた研究内容をご紹介します。

1. 水草を使った光合成の実験

水草をビニル袋に入れ、袋の中の二酸化炭素の割合を測り、朝と昼で比較しました。朝は3.5%あった二酸化炭素が、昼には0.2%程度になっていました。これは、水草が光合成により、二酸化炭素を酸素にかえていった、ということを示しています。

2. 動物に酸素が必要なことを示す実験

バッタをビーカーに入れて蓋をかぶせ、酸素がなくなるとどうなるか、実験しました。呼吸によって酸素を消費するので、バッタはやがて気絶し、3分ほど経って復活しました。また、児童の一人がカエルを捕まえてきたので、カエルでも同様の実験をしたところ、5分後に復活しました。より複雑な生き物は、酸素欠乏状態になってから復活するまでに、より時間がかかることも分かりました。

3. 動物に水分が必要なことを示す実験

水を浸した布と乾いた布の上にそれぞれ同数コオロギを置いておきます。一時間ほど経つと、乾いた布のコオロギは殆ど湿った布の方へ移動していたことから、動物が水分を必要としていることが分かりました。

4. 植物における水分の割合を測る実験

野菜や果物をすり下ろし、さらにすったものを布で絞ります。そのすりおろし汁と絞り汁の重さを、皮や絞るかすの重さとの合計値で割ると、野菜や果物の重量の50~75%が水分であることが分かります。

5. 世界中の水のうち、飲料水として使えるものはどれくらいあるか

10,000 マスのメモリがある方眼紙を用意し、「これ全体が地球上の水の分量だとすると、私たち人間が飲めるのはどれくらいか」ということを児童たちに考えさせます。答えは、たった3マス分なので、飲料水がいかに貴重か、普段の生活の中でも水を大切に扱わなければならないか、気づくことができます。

6. 地球温暖化問題

映画『不都合な真実』を見て、地球温暖化を学びました。

7. 発電とエネルギーの話し

火力発電所の模型を使い、火を燃やすことによって電気を作り出し、その過程で二酸化炭素を排出することを学びました。また、ワッターチェッカーという消費電力や待機電力を測る道具を使い、冷蔵庫や電気ポットなど、身近な電気機器の環境負荷の大きさを実際に調べました。



8. 二酸化炭素の排出量

平均的な生活における二酸化炭素排出量を直径 2.4mの風船に見せることにより、普段の暮らしの中で、いかに温暖化につながる二酸化炭素を多く出しているか学びました。

また、環境教育の取り組みを行うにあたり、教師自身も、琉球大学やNPOの方を講師として招いて勉強会を開き、いろいろと学ぶことができました。

さらに、これらの環境教育活動により、問題に対して自分のこととして向き合えなかった児童たちが、自分たちは何ができるのか主体的に考えるようになったことは、大きな成果といえます。

参加者からのコメントおよび質疑応答

(西表エコプロジェクト 茂木氏)

エコツアーガイドとしての経験からも、特に子どもにとっては、教科書から教わるだけでなく体験を通して学ぶことが大事だと考えていますので、このような実験は非常に有意義だと思います。



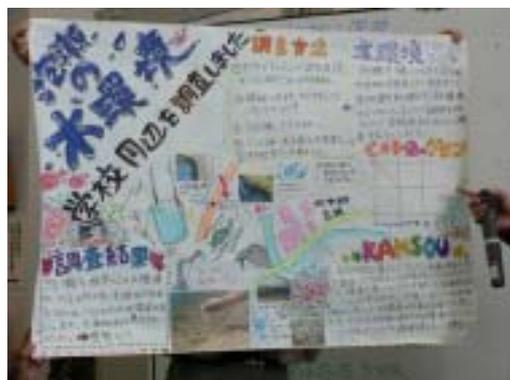
県立北中城高等学校 活動発表

県環境教育プログラムのモデル校のひとつである県立北中城高等学校からは、地学の授業の一環として、学校からも程近く、最近開発の是非について話題になっている泡瀬干潟について研究発表が行われた。社会的にも話題の多いテーマだけに、聴衆は子どもから大人まで、熱心に耳を傾けていました。



地学の授業の一環として、開発の是非が話題になっている泡瀬干潟について、調べてみました。まず、事前に、泡瀬干潟の基本的な知識として、戦後の開発の歴史や、水や川の汚染状況、水辺の生物について学びました。次に、開発賛成、開発反対の両方の意見について、壁新聞にまとめました。開発された場合、沖縄県は自然破壊率が全国一位になってしまうようです。

このようなことをいろいろと調べて自分たちでまとめていくうちに、思ったことを行動に移すことが大事だと気づきました。



さらに、その後、COD という実験器具を用いて、水質がどれくらい汚染されているかということ調べました。その結果、上流の方が下流に比べて水質が悪いことが分かりました。これは、上流や中流からの生活排水が、下流でマングローブに浄化されているのではないかと推測されます。

これらにより、自分たちの暮らしがどれだけ環境に影響を与えているのか考えるきっかけになり、自分の身の回りでできる環境によいことをこれからもやっていきたいと思いました。

参加者からのコメントおよび質疑応答

(環境省那覇自然環境事務所 安田氏)

泡瀬干潟の開発の是非は難しい問題ですが、難しい問題を身近なものと捉えることが大事ですね。私も、昔遊んだ場所がすぐになくなってしまふのは寂しい、何とか自然を守りたい、という思いから今の職業についています。子ども達や若い世代の皆さんには、環境マインドを今のうちから身につけてほしいと思います。



うちなー学生環境サークル EARTH FROGS 活動発表

県内初のインカレ型学生環境サークル「EARTH FROGS」による一連の環境啓発活動は、環境省のチームマイナス6%事業の一環である「民間団体とメディアとの連携支援事業」の1つでもあることから、行政や民間企業、地域の学校などを巻き込んだ活動という点で注目を集めました。



「EARTH FROGS」は、県内で初めて、複数の大学や専門学校の生徒が参加するインターカレッジ型学生環境サークルとして、2007年の7月に立ち上がりました。

8月には、沖縄ファミリーマートの役員や、沖縄県および那覇市の行政担当者と、環境問題への取り組みについて意見交換をしました。

9月には、9大学合同学園祭「情熱大学」において、地球温暖化や環境に配慮した取り組みに関する展示発表やクイズを行い、同世代の学生向けに環境問題をアピールしました。

その後、琉球大学教育学部附属中学校では、地球温暖化に関する出前授業を行い、自分たちよりもさらに若い世代への普及啓発を行いました。

那覇市環境フェアでは、使用済みてんぷら油の回収とBDF(Bio Diesel Fuel)へのリサイクルを実現し、さまざまな世代へ環境問題に対する取り組みをアピールしました。

11月には、やんばるの森を動物写真家の儀間さんと歩き、ここ数年の開発によりヤンバルクイナの生息域が狭まっている話や、温暖化で動植物に異変が起きている話を伺いました。また、木が大量に伐採されて赤土がむき出しになっている様子を見て歩き、沖縄の環境が変わってきてしまっていることを実感しました。

さらに、地球温暖化防止に向けた活動として、IDA(インターナショナル・デザイン・アカデミー)の学生さんと協力して、若者も持ち歩きたくなるようなマイバッグをデザインし、レジ袋削減のためにマイバッグ配布キャンペーンを行いました。12月の名城大学の学園祭では2日間で350枚、ジャスコ那覇店でも400枚を配布することができました。パレット久茂地前広場では、人気アーティストのSOUL CAMPが私たちのために作ってくれた歌を皆で歌いながらマイバッグを配布し、活動をアピールしました。

この他、ラジオやテレビCMに出演し、環境に対して1人ひとりができることから始めようと訴えました。

このような活動を通じて感じたのは、私たちがやっていることは特別なことではなく、誰でも身近なことから始められる、ということです。自分たちの活動を見て、みんなに環境のことを考えてほしいと思ったし、自分たちももっと環境のことを勉強して周囲に伝えていきたい、自分たちが行動することで、周囲も地球もHappyになればいいな、と思いました。

参加者からのコメントおよび質疑応答

(環境省リサイクル推進室 橋本室長補佐)

小学校高学年までは環境活動に熱心だが、中・高校生以上になると、他の事に気をとられ、環境問題から離れてしまうことが多い中で、大学生の皆さんが活動をされるのは素晴らしいと思います。その上で2つ、アドバイスというかコメントがあります。

1つ目は、学生や市民の声から企業や行政を変えてほしいということです。レジ袋削減については、企業はお客さんが逃げるのが怖くてなかなか実施できませんが、学生や市民が呼びかければ、無視できないものになります。

2つ目に、無料配布すると使わない人もいるので、マイバッグを自分で作ることを提案します。壊れた傘の布でマイバッグを作ることを覚え、児童館などで作り方を教えれば、みんな喜んで使うと思います。



世代別グループミーティング

環境保全活動に取り組む団体間のコミュニケーションを蜜にし、今後のパートナーシップ構築の可能性を見出すことを目的として、今年度初めて導入した時間が、この世代別ミーティングです。参加者を、比較的世代や立場に近いグループに分け、小学生・中学生グループ、高校生・大学生グループ、大人グループの3つに分類しました。

グループに分かれ、「これから取り組んでみたい活動」「それを実現するために何をすべきか」等をテーマにミーティングを行いました。

小中学生および高校大学生グループは、「環境保全活動でこれからやってみたいこと」「そのためにまず何から始めるか」をテーマにディスカッションを行いました。

(小学生・中学生グループ)

愛星ネットワークやあかぎ児童館の子どもたちからなる小・中学生グループでは、「キレイな沖縄で遊びまくりたい」という目標のもと、キレイな沖縄を守るためにできることとして、リサイクル、ポイ捨てしないこと、ゴミ拾いなどが挙げられました。そして、明日からでもできる活動として、具体的には、新聞紙やダンボールを捨てないで再利用すること、不要なものは買わないこと、ポイ捨てをしないこと、ゴミを見たら拾うこと、さらにこのような取り組みをする仲間を増やすこと等が話し合われました。



(高校生・大学生グループ)

真和志高校、北中城高校、EARTH FROGSのメンバーからなる高校・大学生グループでは、これから取り組みたい環境保全活動として、やんばるの森の昔と今を知り木を増やす活動、ゴミ分別の徹底、若い世代の様々な活動グループが集まって世の中を変えるために話し合うこと、マイバッグやマイ箸を広めることなどが検討されました。このうち、まず始められることとして、マイバッグやマイ箸が取り上げられました。具体的には、マイバッグやマイ箸のプレゼントキャンペーン、なるべく買い物のときにレジ袋をもらわないこと、週1回マイ箸デーを作って持参する癖をつけること、お店で割り箸を使わないと10円引きにしてくれるキャンペーンなどのアイデアが話し合われました。



(大人グループ)

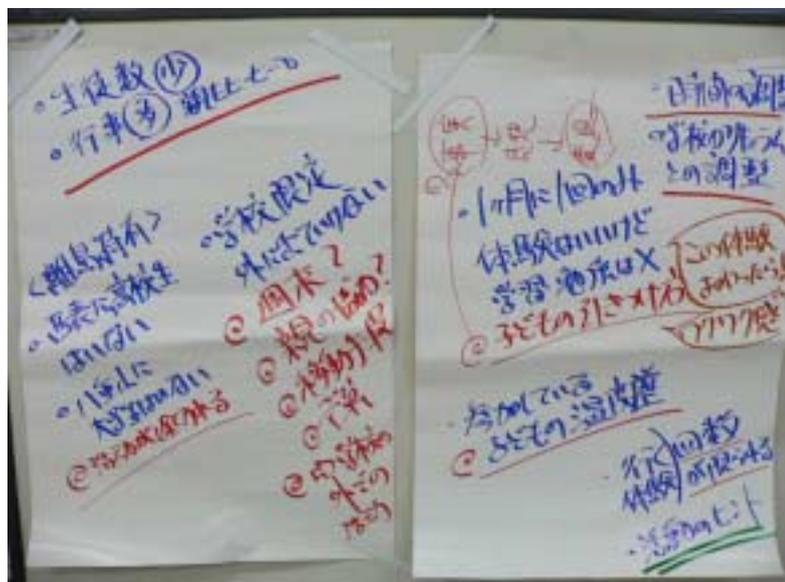
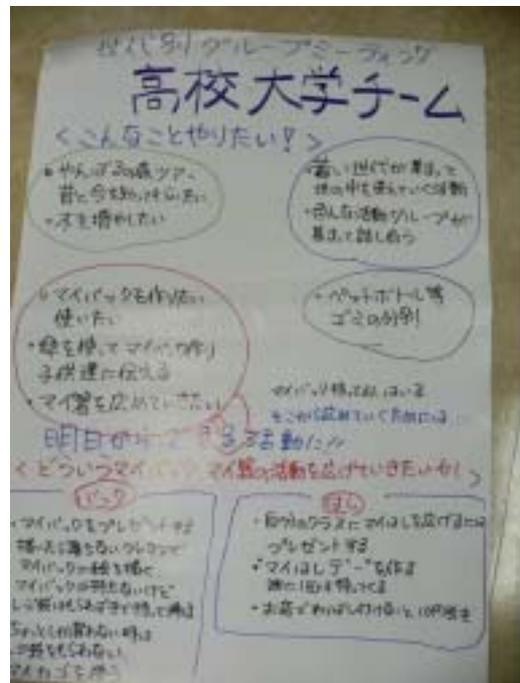
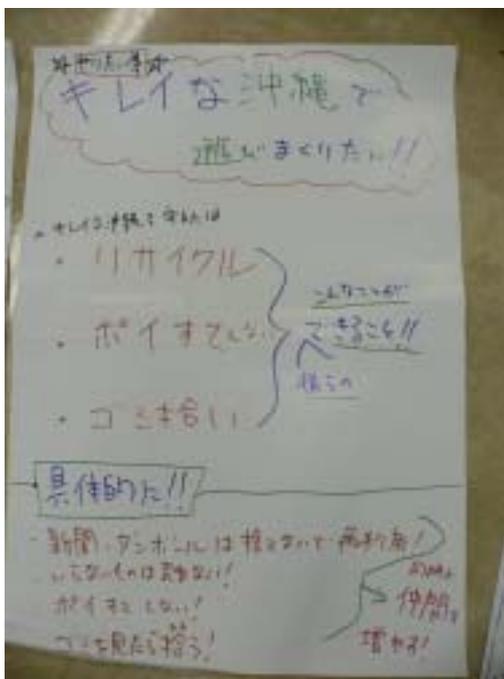
こどもエコクラブ引率者や学校の先生、環境省関係者などからなる大人グループでは、子どもたちの環境保全活動を推進していく上での課題とそれに対するヒントについて、話し合われました。参加者は様々でしたが、体験については喜んで取り組むが学習になると興味を失う子どもたちや、参加者の中でもやる気の低い子どもたちをどう巻き込んでいくか、学校カリキュラムや地域の行事を踏まえての時間的・場所的制約、離島では高校生・大学生がいないので活動が途切れること、などの課題が出されました。



これに対し、参加者同士や環境省関係者からのアドバイスとして、活動に様々な世代を巻き込み、

大学生や高校生にある程度任せて大人が見守ることにより、子どもたちが主体的に考えて取り組むようになること、地域の父兄と学校とのコミュニケーションを密接にとること、などが議論されました。また、エコクラブのサポーターから、学校の先生に対し、電気をこまめに消すなどの家庭内での取り組みを学校でも奨励してほしいという要望が挙げられ、PTA から声を上げてくれれば、学校全体の取り組みとしても推進しやすい、と先生が応じるなど、早速コミュニケーションが深まる場面も見られました。

前述のように、世代別ミーティングは、今年度のおきなわ環境交流集会で初めて採り入れられた試みでしたが、同じ世代が1つのグループにまとまることで、グループの一体感が高まり、意見を出しやすい雰囲気やみんなで頑張っていこうという盛り上がりが見られました。また大人グループでは、日頃の活動で抱える課題をそれぞれが提示し、それらに対してグループ内の別の参加者から解決のヒントや事例が紹介されるという、「支え合う構図」が成り立っていました。以上のことから、世代別ミーティングは、交流促進やパートナーシップ強化という本事業の目的に、大きく寄与したと考えられます。



3 R推進マイスタープログラム「地球は友だち・・・沖縄エコカルタで遊ぼう」

午後は、環境省3 R推進マイスターの吉田順子さんによる進行のもと、子どもたちを対象に、楽しく地球や自然とのつながりを考え、エコライフへの転換を目指すプログラムを実施しました。

プログラムの流れ

<導入>

地球の46億年の歴史を、長さ4.6mの布テープに沿ってイラストを見せながら分かりやすく解説。長い歴史を持つ地球環境が、人間活動の影響でどのように変化してきているかを感覚的に理解された。

人類が生まれたのは、地球の46億年の歴史においてはつい最近のことであり、その中でも、産業革命以後のほんのわずかな期間における人間の活動により、急激に地球環境が悪化したという事実を解説。

その後、人工衛星から見た夜の地球の写真を見せ、照明や油田開発、焼畑などにより、地球の多くの箇所が明るく輝いており、そのために膨大なエネルギーが使われていることを説明。

最後に、「環境」という字の意味を解説する。「環」という字の王偏は、自分の回りを意味し、右上には「目」という字が横になっている。また、「境」という字の土偏は地面を、右側の下部はひざまずくことを意味する。すなわち、環境という字は、自分の周りを目でしっかり見て、土にひざまずいて音を聴く、ということを示している。まさに字のごとく、周りの環境の変化を感じ取り、今こそ真剣に考えようと呼びかけた。

<ワークショップ展開>

3名ずつのグループに別れ、各グループに2~3枚の大判カルタ(絵札)を配布し、その絵を見て思いつく環境関連の文章をカルタの字札として作成した。

各グループでは、子どもたち同士、あるいは付き添いの保護者やスタッフのアドバイスを受けながら、思いついた文章を思い思いに字札カードに記入した。

その後全員集合し、大判カルタ(絵札)を見ながら、各グループで作成した字札を読み上げた。それぞれ子どもたちの感性が現れたユニークな字札が作成された。また、元々のエコカルタの字札解説を合わせて聞くことで、身近な自然とのつながりや生活の中での気づきを感じることができた。

各グループに分かれ、グループ対抗カルタ取り大会を行った。子どもたちは、体を動かしながら自分たちで作ったカルタを取ることで、楽しみながら地球と自分とのつながりを発見したり、エコライフへの取り組みに親しむことができた。



ふりかえり

- ・参加してくれた方々のご協力により、内容的には充実した発表ができた。小学生から高校生、大学生に至る次世代を担う各世代が集まり、それぞれの発表を聞くことができたのは、お互いに刺激となった。また、子どもエコクラブのメンバーやサポーターのみならず、小学校の先生や環境教育モデル校の高校2校、大学生、環境省などから、様々な属性の方にご参加いただいたことで、交流や意見交換を目的とする本交流集会の趣旨が十分に生かされる形となった。
- ・個々の活動発表の後、会場からの質疑応答に加え、環境省リサイクル推進室や環境省那覇自然環境事務所、環境省3R推進マイスター、西表エコプロジェクトといったアドバイザーの皆さまからコメントを頂戴するスタイルを採った。専門家からの意見や提案は、発表者にとって大きな刺激や新たな発見につながった。
- ・昨年に引き続き、会場内に子どもエコクラブや環境教育プログラムモデル校等の発表団体が制作した壁新聞を掲示し、自由に閲覧し感想メモを投函する「壁新聞セッション」の時間を設けた。時間的な制約があったが、力作揃いの壁新聞を前に、今後の活動のヒントを得られただけでなく、自分たちの活動に対して励ましや提案をもらうことで、活動に対する自信と新しい情熱が生まれるきっかけとなった。
- ・今年度の新しい取り組みとして導入した世代別ミーティングは、年代や立場に近い参加者同士でのグループワークであり、交流と情報交換を通じて環境保全活動の刺激を得るというおきなわ環境交流集会の趣旨を体現できる内容であった。全員の顔が見える大きさのグループで、それぞれに2人のファシリテーターを配置し、1人ひとりが発言する機会を持つよう、意義のある配慮がなされていた。各グループとも熱心な話し合いが行われ、用意した30分でまとめるのは難しい面もあったが、同じような立場の人と交流・意見交換を行ったことで、今後の活動をさらに推進する上でのヒントを掴むことができたと思われる。
- ・3R推進マイスタープログラムは、地球誕生の歴史、現在の地球の夜景から考えるエネルギー消費問題、カルタを通じて身近な地球と自分とのつながりを見つめなおすことなど、テーマが多岐に渡っていた。また吉田さん作成のかわいらしいイラストや、地球の夜景を示した絵図など、視覚に訴える分かりやすい教材だった。更に、子どもたちが自ら、絵札を見ながら文章を考えて字札を作成し、体を動かしてカルタとり大会をすることにより、体を動かして楽しみながら学ぶ参加体験型のプログラムとなった。

4. 交流促進・パートナーシップ強化に向けて

ここでは、おきなわ環境交流集会の実施を踏まえ、沖縄県における環境保全活動がさらに拡大・発展していくことを目的として、県内の環境保全活動実施団体が今後効果的な交流を促進し、互いのパートナーシップを強化していくための提言を記します。

1) パートナーシップとは

パートナーシップ（協働）とは、行政・NPO・企業など、立場の異なる組織や個人同士が、明確な目的のもとに、対等な関係を結び、それぞれの得意分野を生かしながら、連携し協力し合うことです。団体や個人間のパートナーシップが強化されることによって実現できる可能性としては、主に以下の点を挙げることができます。

それぞれの特徴を生かし合った合理的な課題解決の枠組みが構築できる。

資源の共有や適切や役割分担を通して、活動の効率性や継続性が高まる。

新しい発見やアイデアを通して、従来には考えられなかった大きな可能性を見出し、活動により大きな活力が生まれる。

以上の点から、沖縄県における環境保全活動のさらなる拡大・発展には、相互の交流促進とそれに伴うパートナーシップの強化が不可欠な要素であると言えます。

2) 交流を促進するためには

環境保全活動に取り組む団体や個人相互の交流を促進するためには、お互いの存在を知ることから始める必要があります。おきなわ環境交流集会のように、直接の担当者が顔を合わせながら情報交換や意見交換をすることが一番の理想ではありますが、それぞれの活動拠点が離島も含め県内の様々な場所に点在している現状では、関係者が実際に顔をつき合わせての会合を開催することは、容易ではありません。

従って、おきなわ環境交流集会のような「実際に出会える空間」を、補完する仕組みを構築することが、交流を促進させる鍵になると言えます。

また、沖縄県が推進している「沖縄県マルチメディアアイランド構想」に則り、沖縄県内でもインターネット技術の普及・整備が急ピッチで進められています。インターネットの技術により、交流促進を阻害する物理的な距離の隔たりを解消できることから、ここで提言する「補完する仕組み」の構築には、インターネットの利活用が大きな役割を果たすと考えられます。

提言1 それぞれの団体や個人が、自分たちがどのような活動をしているのかを定期的に発信する習慣を身につける。

「今」を正確に理解することで、「将来」の交流への足がかりが生まれます。すなわち、活動内容等の情報が古いままでは、「今」を把握することができず、従って「将来」への関係も築くことができません。団体の場合は情報発信の担当者を明確にし、個人の場合は情報発信を常に意識しておくことで、定期的に更新された最新情報を内外に発信することが可能となります。

提言2 団体や個人で発信する内容が大きく変わることはないように、共通のプラットフォーム(基盤)整備を行う。

情報を発信することが盛んになっても、それぞれ発信している情報の内容に大きな隔たりがあれば、それらを比較検討することが難しくなります。従って、情報発信に当たっては共通の項目を定め、その項目に則った情報を整理することが重要となります。

一方、交流促進のためには、それぞれの団体や個人の活動を正確に把握することだけでなく、共通点や得意・不得意分野を発見し理解することが重要です。従って、上述の共通の項目の具体例としては、活動目的・活動内容(実績)・所在地・代表者・連絡先といった基本的な情報に加えて、活動を展開するうえでの課題・得意とする分野・不得意とする分野・求めている情報・これからの活動予定・今後の希望といった項目も、検討に値します。また、写真等もふんだんに盛り込みながら、分かりやすい・見やすい・伝わりやすい情報づくりを心がけることが求められます。

提言3 それぞれの団体や個人が、容易に情報の受発信ができる媒体を確保する。

交流の促進のためには、情報発信の容易さと、情報入手の手軽さが欠かすことのできない要素となります。すなわち、情報受発信の際に、場所や時間、経費等にあまりとらわれない状態を持続させることが大切なポイントです。

従って、インターネットを使って利用できる様々なホームページサービス(ブログサービスや掲示板サービス、SNS(Social Networking Service)等)を利活用できる仕組みを構築することが重要と考えられます。

一方で、現在多くの環境保全活動実践団体が、各自でホームページを制作していますが、情報を探す側の立場に立つと、それぞれの団体のホームページを探すところから始めなければならない、かなりの労力がかかってしまう結果となっています。

従って、行政とNPOの協働により、各団体の情報が一同に集まり閲覧できる沖縄県内の環境保全活動のポータル(玄関口)サイトを構築するなど、情報を集約できる仕組みを整備することも検討に値します。

3) パートナーシップを強化するためには

交流が促進し、お互いの情報や強み・弱みを正確に把握できたとしても、それがすぐにパートナーシップの強化につながるわけではありません。前頁で記述した、パートナーシップの強化による効果を具現化するためには、交流促進の次の段階へと移行させる必要があります。

パートナーシップは複数の団体や個人によって成り立つものであり、実際には複数の人間が絡み合っただけで成し得るものではありません。従って、「実際に出会える空間を補完する役割」としての、インターネットによる情報のやり取りだけでは不十分であり、関係者が直接対話を重ねることで、パートナーシップの実現可能性が高まります。パートナーシップの強化を考えるためには、情報の受発信によって交流が促進された状態の団体や個人が、実際にどのようにして協働へのステップを上げていくかが鍵となります。

提言1 それぞれの団体や個人が、パートナーシップへの意識を強く持つ。

「交流を促進するためには」の項目で提言した内容が具体化したとしても、それぞれの情報を把握しているだけでは、パートナーシップは生まれません。情報を閲覧する中で、活動の内容や今後の方向性等に共通点を見出すことのできた場合は、積極的に「この団体（または個人）と一緒に活動することでどのようなメリットが生まれるだろう」ということを考えることが重要です。

ここで大切なことは、パートナーシップの条件として、双方が対等な関係を築くという点です。「どちらか一方には大きなメリットや活力が生まれるが、もう一方はそれほどでもない」という状態では、対等な関係とは言えません。いわゆる win-win の関係が実現するために、自分たちの活動だけでなく相手方の活動におけるメリットも考え、どうすればその2つを最大限に高めることができるかを考える必要があります。環境保全活動を実践する団体や個人がこうした習慣を身につけ、常にパートナーシップを意識することで、1+1が3にも4にもなり得ます。

提言2 パートナーシップの橋渡しを行う事務局機能を整備する。

交流が促進した結果、「この団体と一緒に活動したい」と考えるようになったとしても、直接相手方に連絡を取ってパートナーシップの構築を図ろうとするには、多くの時間や労力が必要です。その煩雑さゆえに、途中で挫折してしまい、結果として交流は促進したけれどもパートナーシップの構築までは辿りつかないというケースも考えられます。

従って、他団体や個人とパートナーシップを組みたいと考えた際に、気軽に相談でき、かつ実質的な橋渡しをしてくれる存在としての事務局機能が必要になると考えられます。沖縄県には、多くのNPOや市民活動をサポートする組織としての「NPOプラザ」や「沖縄県ボランティア活動支援センター」、環境情報の集約と発信を担う「地域環境センター」といった中間支援組織が存在しています。こうした団体や環境NPO等が、前述のような事務局機能を有するという可能性もあります。

ここで述べる事務局機能に求められることは、優れたファシリテーターでなければならないという点です。このファシリテーターとは、パートナーシップを構築しようとする両者の中間に位置し、話し合いを円滑に進行したり、両者の強み・弱みを分かりやすく整理したりする役割を担う者のことで

す。優れたファシリテーターが介在することで、パートナーシップが構築・強化される過程が滞らずに、より活力に溢れたものへと高まっていきます。

優れたファシリテーターが存在すると、その者に意思決定を一任するケースも見受けられますが、主体性が失われるという観点から得策ではないと思われます。全ての関係者が対話を重視した意思決定に参画し、ファシリテーターはあくまでそのプロセスを管理するという意識を持つことが重要です。

提言3 お互いの役割分担を明確にする。

パートナーシップの構築に向けて動き始めると、具体的にどこからどこまでが自分の役割や責任なのかが曖昧になってしまう危険性があります。その結果として、相手からの信頼を損ねたり、逆に自らの信頼を失うことにもなりかねません。win-win の関係を築こうとするからこそ、お互いの役割分担を明確にし、イメージを共有することが重要になってきます。

例えば、具体的な勧め方として、話し合いが進むにつれて、必要となる役割をすべて書き出し、視覚化するという手法があります。その情報を基に、個々にどちらが担当するのかを明確にし、曖昧な部分をできる限りなくすことで、お互いの信頼関係がより強くなり、パートナーシップの強化につながります。

提言4 3つ以上のパートナーシップを模索する。

パートナーシップと聞くと、2つの団体や個人間におけるものとイメージしがちですが、実際には3つ以上の異なる存在間におけるパートナーシップもあり得ます。時には、こうした3つ以上の関係者によるパートナーシップこそ、これまでと異なる全く新しい潮流を生み出す契機となったり、社会に対して大きな影響力を持つ結果となることもあり得ます。

おきなわ環境交流集会の最大の目的は、県内における環境保全活動がさらに発展・拡大することにあります。環境保全活動の発展・拡大の要因は、実際に活動を実践している団体や個人のパートナーシップに限りません。例えば、環境保全活動を支援したいと考える企業や行政、教育の現場に採りいれたいと考える学校関係者とのパートナーシップを強化することも、環境保全活動の発展・拡大の大きな原動力となります。

従って、環境保全活動を実践している団体や個人に対しては、環境保全活動に間接的に関与したいと考える団体や個人を積極的に探し、パートナーシップを提案するという「企画力」が求められます。この場合、1つの団体や個人による作業では現実的に難しいケースが多いと考えられますので、複数の環境保全活動実践団体と協働で提案を行うことが検討に値します。環境保全活動実践団体A×環境保全活動実践団体B×企業というパートナーシップや、環境保全活動実践団体×企業×行政というパートナーシップも考えられます。